
光と闇の狭間 martini編

martini

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と闇の狭間

martini 編

【Nコード】

N4182F

【作者名】

martini

【あらすじ】

ジンが記憶喪失?!その話を聞き、FBI、そしてコナンや哀も啞然。何も覚えていないジンに忍び寄る魔の手。そして明らかになっていく、新たな犯罪組織・・・コナン達は、どういう行動に出るのか?そして、ジンの記憶は戻るのか!

第3章 厄介

ボタンッ！

赤井達は、勢いよく扉を開けた。

そこには、眠っているジンが居た。

「脈拍も正常だし・・・大丈夫だな。」

画面を見て、そう吐く赤井。

それを見て、ジョディは言った。

「でも、どうしてジンは事故に巻き込まれたのかしら？ジンなら、避けることぐらい、簡単に出来たはずなのに。」

「そう言えば・・・そうだな。」

ジョディの疑問に、皆は考える。

だが、いくら考えても答えは出てこなかった。

その時だ。

「ん・・・」

「ジン？」

スーッとジンの目が開けられていく。

ジンが、目を覚ましたのだ。

「目を覚ましたか。」

3人は、ベッドに近付く。

「どうだ？調子は。」

「・・・」

赤井の問いに、ジンは答えない。

ただボンヤリと、赤井の顔を見つめるだけだった。

そして、ジンがゆっくりと口を開いた。

その言葉は、衝撃的なものだった。

「あなたは・・・誰ですか・・・？」

『はっ・・・？』

3人の驚きの声が、見事に重なる。

当たり前と言えば、当たり前なのだが。

「・・・ジョディ。医者を呼んで来い。」

「え？え、ええ、分かったわ・・・」

ジヨディは、赤井に頼まれ、部屋を出ていった。

ジヨディが出て言ったあと、赤井は、ジンに聞いた。

「お前・・・名前は？」

「・・・」

ジンは、黙って首を横に振った。

分からないと言ったことだ。

「・・・そうか。」

赤井がそう言った瞬間。

バタンツ！

扉が開いた。

そこにいたのは、ベルモット達だった。

「ジンが轢^ひかれたってのは、本当かい?!」

キャンティが、入ってくるなり聞いてくる。

「ああ、それに、少し厄介だぞ・・・」

「厄介?」

ウォッカが言う。

赤井は、黙ってしまった。

すると、ジョディが医者を連れて、部屋に入ってきた。

医者の息が切れている。

大分走らされたようだ。

「と、とりあえず、質問していいですか？」

医者、ジンに聞く。

ジンは、静かにうなずいた。

「じゃあ、まず聞きますね。あなたのお名前は？」

「・・・」

静かに首を横に振る。

「そうですか・・・とりあえず、精密な検査が必要です。少し来ていただけますか？」

にこつと微笑みそう言う医者、ジンはコクンとうなずく。

そして、医者、後ろを、ついていった。

皆の頭に、一つの言葉がよぎった。

『記憶喪失』

この言葉が・・・

第3章 厄介（後書き）

こんにちわ、martiniです。

実は、私と美世は、同一人物なのです。

パソコンが2台あるんです。

で、今使ってるのは、お母さんのパソコンです。

もう一つのパソコンは、家族みんな用で。

これからは、こちらだけで行きたいと思います。

勝手ですが、宜しくお願いします。

第4章 無情にも

「検査が終了しました。」

医者が、部屋へと入ってくる。

「どう・・・だったんですか？」

ベルモットが聞く。

皆には、絶対に言ってほしくない言葉があった。

その言葉とは・・・

『記憶喪失』

記憶喪失ではないと、言ってほしかったのだ。

記憶の混乱だと。

しかし、その思いは無情にも砕^{くだ}かれた。

「どうやら、記憶喪失になっているみたいです・・・何もかも、さっぱり忘れてるようで・・・」

『・・・!-!-!』

やはり記憶喪失だったのか・・・

その思いが、皆の心を支配した。

「いつ・・・」

「え？」

「いつ、記憶が戻るか、分かりますか？」

そう聞いたのは、赤井だった。

「それは・・・残念ながら、分かりません・・・すみません、お役に立てなくて・・・」

ペコリと頭を下げる医者に、皆は大慌て。

「い、いや、そんなことないよ！助けてもらっただけでも、いいほうさ！ほらっ、あの人以上は、皆死んじまったんだろ？でも生きてるってのは、幸運さ！記憶喪失しても、生きてりゃいつか、記憶なんて戻るよ！なっ、皆？」

キャンティが、必死になって言った。

皆も、その言葉にうなづく。

「あなたのおかげで、あの人は助かりました。本当に、ありがとうございます。」

皆は、頭を下げた。

医者は、微笑んで、こう言った。

「ありがとうございます・・・とりあえず、記憶を戻せるように、私どもも全力を尽くします。それでは。」

医者は、部屋から出ていった。

そのかわり、ジンが中に入ってきた。

「・・・」

ジッと、ジンは赤井達を見つめた。

どうやら、入っているのか分からないらしい。

すると、ジェームズがジンに、手招きをした。

「おいで。ここは君の部屋なんだから。」

笑っているジェームズを見て、ジンは安心したのだろうか。

静かに部屋の中に入ってきた。

そして、ベッドの上に座る。

「ねえ、ジン。」

「ジン？」

ジンは、首を傾^{かし}げる。

そうだった。

ジンは、記憶喪失だったんだ。

皆は瞬時にそう思った。

ジョディが、こう言った。

「『ジン』って言うのは、あなたの名前よ。」

「……私の名前……ですか？」

ジンは、キョトンとする。

「そうつすよ、兄貴。」

「あ、あに・・・？」

聞きなれない言葉なのか、またまた首を傾げる。

「あつ、すいやせん、つい・・・」

と頭を下げるウォツカを見て、ジンは言った。

「いえ・・・気になさらなくて結構ですよ・・・」

薄っすらと笑うジンに、今度は赤井達がキョトンとした。

ジンの笑い顔など、初めて見たから。

薄っすらと笑っているところなんて、滅多に見れない。

自分たちが知っているのは、冷酷な笑みだけだった。

少しおかしいとおもったのだろう。

ジンは、言った。

「あの・・・どうかなさいましたか・・・？」

聞いてくるジンを安心させようと思ったらしく、皆は薄っすらと笑う。

「いや、何もない。」

素っ気なく言う赤井に、ジョディは、

「もう少し優しくできないの？今は敵じゃないんだから。」

と言った。

赤井は、

「せいぜい頑張っておく。」

と答えた。

ジョディは、もう諦めたらしく、ジンを見た。

「ねえ、ジン。別に敬語じゃなくていいのよ?」

ジョディの言葉に、ジンは驚いたらしい。

固まっちゃっている。

「だ、大丈夫?」

ジョディが、顔を覗き込む。

「えっ、あっ、はい、大丈夫です・・・」

「ならいいけど・・・」

ジョディは、まだ少し心配そうだった。

「とりあえず、どうして敬語なの？」

「えっ？え、えつと・・・」

急に言われ、戸惑^{とまど}っているようだった。

「まあ、いいだろう。とりあえず、休め。」

赤井が言う。

そう言われ、ジンも考えるのをやめた。

「ありがとうございます・・・」

ベッドに入り、ジンは目を閉じた。

そして、寝息を立てた。

「眠ったな・・・」

「ええ・・・」

皆、さつきとは比べ物にならないぐらいの、顔の暗さだった。

やはり、無理をしていたのだろう。

「ジンの記憶は・・・戻るのかしら・・・」

ベルモットが、心配そうに吐く。

「だ、大丈夫だよ！きっとすぐ戻るって！なっ？」

キャンティは、頑張って励まそうとした。

自分だって、辛いのに。

「ありがとうキャンティ・・・そうよね。あのジンが、記憶を失ったままなんて、あり得ないものね。」

もう一度、ありがとうと言った。

皆は、ジンの寝顔を、ジッと見つめていた・・・

第4章 無情にも（後書き）

こんにちわ、martinniです。

ジンが敬語を使うなんて、思いませんでしたけど、記憶喪失なら、いいかなあと。

一回でいいから、敬語を使っているジンを書きたくて。

感想や、意見を待ってます♪

第5章 何を

次の日。

今は、5時だった。

ジンは、皆より早く起きた。

「ん・・・？朝・・・？」

ゆっくりと起きる。

まだ、少しボンヤリとする。

そんな頭を起こし、朝食を作ろうとする。

その時。

「ん・・・」

どうやら、誰かが起きたらしい。

「あっ・・・」

「ジン？お前、起きるの早いな。」

「えっと・・・お名前を・・・」

ジンは、誰なのかが分からないらしい。

「俺か？俺は赤井秀一だ。」

「赤井・・・さん？」

そう、起きたのは赤井だったのだ。

ジンは、はっと我に返った。

「あつ、今から朝食作りますね。ちょっと待っててください。看護婦さんたちに頼んで、台所を使わせてもらいますから。」

ジンは、タタッと走っていった。

「何だ？あいつは・・・」

『おはよう。』

残りの皆が起きたのは、それから1時間後のこと。

その頃には、朝食は出来ていた。

「おはようございます。」

にこつと微笑み、言うジン。

「あら、朝食、作ってくれたの？」

ジョディが嬉しそうに言う。

「ええ、まあ。あの、お食事の前に・・・お名前を聞いても宜しいですか・・・?」

少し躊躇^{ちゅうちゅう}気味に言うジンに、ジョディはにこつと笑う。

「いいわよ。私はジョディ・スターリング。」

それにつられて、皆も名乗る。

「あつしはウォッカって言いやす。」

「私は、ジェームズ・ブラック。」

「あたいは、キャンティだよ。」

「俺、コルン・・・」

「私は、ベルモットよ。」

皆の名前を聞き終えた後、ジンはまたにこつと笑い、

「教えてくれて、ありがとうございます。それじゃ、食事といきましよう。」

と言った。

そして、皆の言葉が重なった。

『いただきます。』

一口食べた瞬間、ジョディが言った。

「おいしい！すごくおいしいわ！」

「本当！今度、料理教えて！」

「あつ、それならあたしも！」

と、女子はジンに言った。

ジンは、少し困っている様子。

そこに、赤井が小さく言った。

「・・・女が男に負けてどうする。」

『・・・』

今の発言に、女子は赤井を睨む。

だが、その通りだ。

「その通りじゃないか？男のほうが料理がうまいなんて・・・あまり聞いたことがないぞ？」

『あなた・・・バラすよ（バラすわよ）。』

「・・・！」

女子3人組の、言いようのない気配が、赤井達を襲う。

言った張本人の赤井も、これには驚いたらしい。

殺気立たせて近付く女子3人組。

それを、ジンはジッと見ていた。

そして、流石に危ないと思ったのか、止めに入った。

「と、とりあえず・・・食事は楽しくしましょう？ねっ？」

顔を引き攣^ひらせながらも、作り笑顔で何とかしよつとするジン。

「・・・ジンに免じて、今日はこれぐらいにしておくわ。」

「そうね。」

「そうだね。」

ジンのおかげで命が守られた、男子4人組なのであった。

とりあえず、また食事へと戻る。

そこから、楽しい話や、笑い話等で、場は盛り上がった。

ジンは、ついていけない様子で、たまに黙る。

しかし、皆はすぐにそれに気づき、話の中に加わらせる。

話している間の時間は、とても短く感じられた。

気がつけば、1時間以上も話していた。

「あらやだ。もう1時間はとっくに過ぎてるじゃない！おしゃべりしすぎたわね。」

ベルモットの言葉に、皆は一斉に時計をみる。

今は、7時15分だ。

食べ始めたのが6時で・・・

と考えていると、またベルモットが声を上げた。

「あっ！どうしよう！私、あの方に報告書出すの忘れてた！」

「あっ！あたいもだよ！」

「あっしもです！」

「俺も・・・」

ベルモット達は、顔を見合わせる。

そして、勢いよく部屋から出ていった。

ジンは、そんな様子を、黙って見ていた。

そして、クスクス笑いだす。

「お忙しい方たちですね・・・クスッ。」

ジンは、笑いが止まらないらしい。

ずっとクスクス笑っている。

その光景を、赤井達はジッと見ていた。

その視線に気付いたジンは、ピタッと笑うのをやめた。

「あ、あの・・・どうかなさいましたか？」

この緊迫した空気に耐えられないのだろうか。

ジンは、少し扉側に後ずさり、言った。

少し気難しそうな顔をしていた赤井も、少し微笑んで、

「いや、何でもないさ。」

と言った。

ジンは、少し不審に思った。

何か隠している。

絶対に、何か知っている。

そう思える確信は、どこから出てきたのだろう。

考えても分からない事は目に見えているので、考えはしない。

だから、聞くのだ。

目の前の相手に。

聞く決心のついたジンは、思い切って言った。

「あ、あのっ。」

「ん？何だい？」

ジェイムズが、ジンの顔を見る。

無論、赤井も。

少し怖かった。

もしかしたら、聞いてはならないことかもしれない。

傷に触るようなことを聞くかも知れない。

そう思うと、恐怖で口が開けなくなる。

しかし、なぜかその恐怖に勝つことができた。

よく分からない。

そんな感情を持ちながら、ジンは口を開いた。

「・・・あなたたちは、私の何をご存知ですか？」

『!!!』

赤井達の顔が、一瞬にして変わる。

それを見ながらも、ジンは言葉を続ける。

「・・・何を隠していらっしゃるのですか？私のことなら、教えていただきたいのです・・・お願いを聞いてはいただけませんか？」

「・・・」

赤井達は、黙ってしまった。

ジンは、そんな赤井達を、ジッと見る。

赤井は、ゆつくりと口を開いた。

「・・・俺達が知っているのは、名前だけだ。ほかは何も知らない。」

「そんなの・・・っ！」

嘘ですよ！

そう言おうとした。

しかし、赤井の鋭い視線に、言葉を出すことができなかった。

「いいか？お前はまだ知らなくていい。時が来たら・・・教えてやる。約束だ。」

なっ？

そう言って、ジンの顔を覗き込む赤井。

ジンは、ただ突っ立ってるだけだった。

それから数分後。

ジンは我に返った。

ハッと赤井達を見る。

さっきの表情とは、全然違う、表情だった。

「……すみません、おかしなことを聞いて……少し頭を冷やします……」

ジンはそう言い、部屋を後にした。

そこには、重苦しい空気しか、残されてはいなかった……

第5章 何を（後書き）

こんばんわ、martiniです。

少し時間が開きましたね。

すみません。

とりあえず、誤字などがあれば、なんなりと言ってください。

感想や意見、待ってます。

第6章 謎

ジンは、外にいた。

赤井に聞いても、結局、心のモヤモヤは取れることはなかった。

余計、モヤモヤが増えてしまったようなもの。

それなら、聞かなければよかった。

ジンは、そう思っていた。

ボンヤリと、裏道を歩いていた時だ。

背後に気配がした。

自分とは思えないほどの体の俊敏しゅんびんさに、自分も驚いてしまう。

とりあえず、背後にいた人を睨みつける。

そこにいたのは、女性だった。

「女性・・・？」

驚きの声しか出せない。

その女性は、フツと笑い、口を開いた。

「・・・久しぶりね・・・」
「フィヤラ Y ?」

「えっ・・・？」

フィヤラ？

それは誰のことだ？

そう聞きたかった。

だが、その女性の放つプレッシャーに押され、出すことができなかった。

「あら？あなた、もしかして記憶喪失なの？」

首を傾げる女性。

首を傾げたいのはこっちなんだけど。

そう思わざるをえない。

女性が、また口を開いた。

「そう・・・じゃあ、私のことも分からないのね。」

「???」

どうしたらいいのかわからず、ただ混乱するだけのジンに、女性は軽く笑う。

「しょうがないわね・・・」
「W^{ラフ}」
「！」

「ハッ！」

「????」

今度は、ラワファ？

もう、何が何だか分からなくなってしまったらしい。

ジンは、とりあえずその場から逃げることにした。

そして、背を向けた。

すると、女性はこう言った。

「私は、^{ハザナ} Z[、]。それだけは覚えていてちょうだいね、フィヤラ・・・
ラワファ！フィヤラを！」

「ハッ！」

混乱しているジンの元に、ラワファと呼ばれた男が来た。

「え、えつと・・・」

ジンは、混乱状態のままだ。

ラワファは、スッと目を閉じた。

ジンは、それをジッと見ていたが、次の瞬間、光に包まれ、視界が真っ白になった・・・

「あれ？」は・・・」

ジンは、辺りを見渡した。

ここは、自分が居た、あの病院だったのだ。

「テレポーテーション
瞬間移動・・・？」

あの男は、そんな力を持っていたというのか？

謎が、謎を呼ぶばかり。

また、混乱し始めた。

すると、ジンの耳に、微かすかに自分の名を呼ぶ声が聞こえた。

ああ、そうだ。

自分は頭を冷やしに行くと言ったつきりで、部屋を出ていった。

それから10分は経っている。

流石に、心配になったんだろう。

そんなことを考えていると、タタタツと自分に向って走ってきている足音が聞こえた。

見えてきたのは、ニット帽をかぶった男。

赤井だった。

「ジン！お前、どこに行っていた？！」

姿を見つけるなり、ものすごいスピードで走ってきた赤井に、ジンは驚いてしまった。

それに、怒られている。

「えっと・・・その、ごめんなさい・・・！」

謝ることで、精一杯だった。

そっと顔をあげてみると、さっきよりは優しい表情だった。

「皆、心配してたぞ？早く行こう。」

「は、はい。」

赤井に連れられ、病院の中へと、ジンは入っていった。

第6章 謎（後書き）

こんばんわ、martiniです。

この話に、瞬間移動テレポーテーションとありましたよね？

あれって、テレポートのほうか、いいんですかね？

とりあえず、そこを教えていただきたいです。

感想や意見、待ってます♪

第7章 深まるばかり

ジンは、部屋に戻った。

皆と会ったあと、さっき会った女性と、その場にいた、男性のことを話した。

「え?! おかしな女性が、あなたのことをフィヤラって呼んでた?」

「それに、その場にいた男性は、ラワファと言って、瞬間移動テレポーターらしき力を使った、と・・・」

皆は、その話に驚きが隠せないようだ。

「その話、本当なの? ジン。」

「はい。確かにそう言ってましたし、言われました。間違いはありません。ただ、どうして私がフィヤラと呼ばれるのかが、分からないくて・・・」

うーんと唸うなるジンを見て、皆も唸うなってしまう。

「とりあえず、今のところは大丈夫でしょうね。」

ジンがそう言う。

「だな。」

赤井も、ジンの意見に賛成する。

「とりあえず、昼食でも作りますね。」

にこつと微笑み、部屋を出ていった。

「・・・？」

赤井だけだろうか？

どこからか、視線が感じられると思ったのは・・・

その日の夜。

ジンは、あのハザナという女性のことを考えていた。

自分を、フィヤラと呼んでいた、謎の女性。

そして、瞬間移動らしき力を使った謎の男、ラワファ。
テレポーション

この二人は、いったい何者なのだろうか。

それしか、考えられなかった。

ウトウトと、眠りかけていたその時。

窓がバツと開いた。

びっくりして、窓のほうを見ると。

そこには、ラワファが居た。

「ハザナ様からの伝言だ。明日0時。お前を迎えに行く。もしこのことを誰かに言えば、命はないと思え。とのことだ。じゃあな。」

「ちょ、ちょっと待ってください!!」

ラワファは、ジンを無視して、どこかに行ってしまった。

「・・・」

ジンは、ただ、悩むほかなかった．．

第7章 深まるばかり（後書き）

どうも、martiniです。

ここに書いてもいいことかどうかわかりませんが・・・

私の小説、『禁断の恋』を、削除しました。

勝手にすみません。

話が、わけ分からなくなってしまったもので。

本当に、申し訳ありません。

第8章 朝の風景

朝になった。

ジンは、ゆっくりと体を起こす。

昨日の事は、はっきりと覚えていた。

しかし、悟られては危ない。

ジンは、そう思うと早く朝食を作ることにした。

しかし、時計を見て、ジンは固まってしまった。

「・・・8時？」

そう、8時だったのだ。

皆は、もつとつくに起きているだろう。

「・・・ヤバイ！」

バツとベッドから飛び降り、ダダダツと赤井達のいる部屋へと行った。

バタンッ！

ジンが部屋に入ると、皆はコーヒーを飲んでゆっくりとしていた。

テレビをつけ、ベルモット達女子は大爆笑して。

ジンが入ってきたことに気付いた女子達は、ジンを見る。

「お、おは、おはよう、ぐっございま、すっ！」

切れぎれであいさつを言われても、と思う赤井達は放っておくとする。

「寝坊してしまいました・・・すみません！」

それだけ言うと、ジンは外へと飛び出した。

「おい・・・朝食、食ったんだが・・・？」

しかし、もう遅い。

赤井達は二度、朝食をとることになってしまうのだ。

ジンが持ってきた朝ごはんを、赤井達は苦笑いを浮かべながら食べた。

食べ終わった後、ジンは自分達で食べたんだと知ったらしい。

ジンは、何十回と謝ってきた。

そして、赤井達は何十回と‘いいから’といい続けた。

騒がしい朝の風景だった。

第8章 朝の風景（後書き）

どうも、martiniです！

意味の分からない文ですみません・・・

これでも頑張ったんですよ！（嘘だろう！）

どうか、評価をください！

でも、中傷的な文はやめてくださいねw

評価、待ってまーすw

A・HAPPY NEW YEAR!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4182f/>

光と闇の狭間 martini編

2010年10月9日23時41分発行